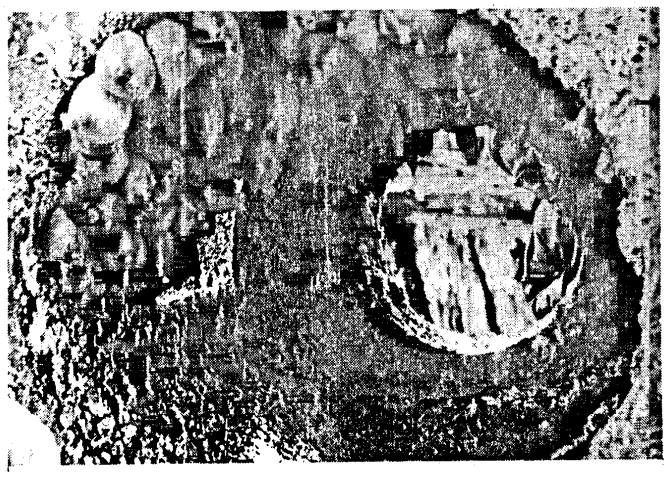
表顔を見せた魚礁ブロック

増殖部　尾身東美

コンクリートブロックを投入する魚礁作りは全国で広く行われており、道東でも三支庁管内で行われております。これら魚礁に魚が集まることは古くから知られているのですが、これが一体どうしてなのか、まだ十分説明しつくされているわけではありません。よしんば説明されていても人間と云う動物直接自分の目で確めないことには自分の地先の魚礁がどうなっているのか疑問のわくのはあたりまえです。わたくしたちもこの目で実際に見たいものだと常々思っていたところですが道東の魚礁は三〇～五〇mの深い所に作られているので潜水艇でもなければそう簡単にできることでもありません。昭和三七年北海道大学の潜水艇くろしお号が釧路沖の魚礁に潜り三六年に投入したものを見つけ実際の魚の集り具合を見たことがあります。この時は怒越のためブロックに付いた魚の餌など細いところまでは見ることができませんでした。今回、開発局の釧路港沖海底調査が行われたのを機会に魚礁ブロックを引上げて見ようと云うことになり昭和三六年と三七年の魚礁を目標にアクアラング（空気を詰めたボンベを背負い、陸上との連結なしに自由に動ける潜水器具）で山内さんと云う方に潜ってもらいました。この様に深い所から魚礁を揚げることは最近小樽沖でよみうり号が揚げたほか例がなく、又道東の海は濁りが多く二～三mも先は霧の中の様に見通しが悪いのでうまく行くか心配しましたが、九月六日と九日にやって見ました。この結果、それぞれ一ケづつ見つけることが出来、その内三六年投入のものを引上げました。表紙の写真がそれです。ブロックは海底に横になった状態でコンクリートの厚みの部分まで砂中に潜っており、表面にはゴカイ類、コケムシ類（通称ノウサンゴ）が一面に付着し内側は上面いっぱいにアカボヤが付着、天然の岩礁地帯の様子と同じで、　魚が集まることがあきらかなことが分かりました。昭和三六年の魚礁は翌三七年くろしお号が見たものです。この時ブロックに付着している生物はほとんどなく魚だけが泳いでいたことが報告されています。あれから七年、つくもの付いて立派な魚の住み家として薄暗い海底にあぐらをかいている姿を想い頼もしく思うのは私一人でしょうか。

（註）実物は水試に保管してあります。また、このくわしい報告はあらためて行なう予定です。



写真説明　ブロック内壁の上部にはアカボヤがびっしり着生していた。